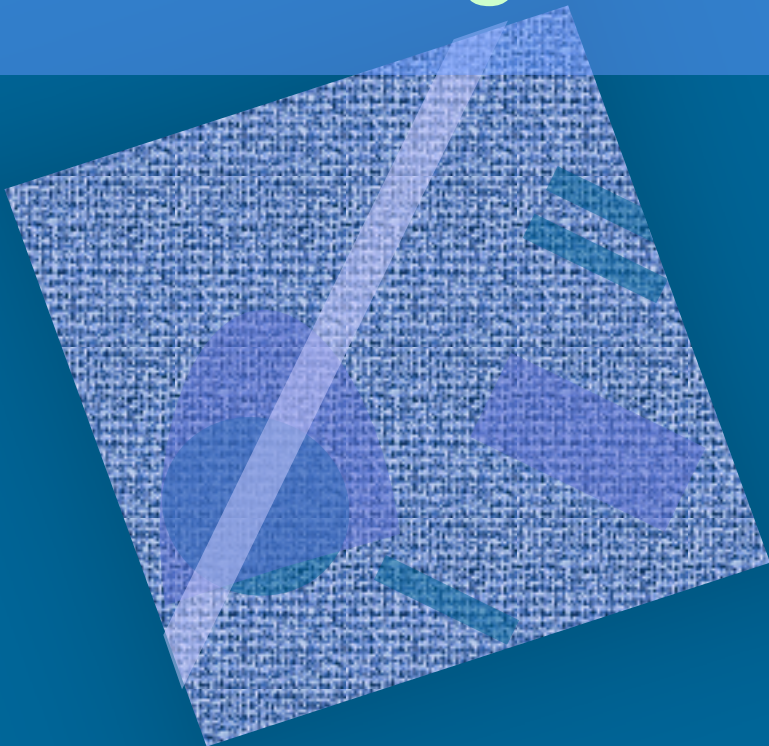


生権力と死の思想

金森 修

東京大学教育学部
waskana@p.u-tokyo.ac.jp

§ 1 フーコー



Michel Foucault, 1926-84

- *Les Mots et les choses*, 1966 の世界的成功によって、〈構造主義〉の代表的論客として脚光を浴びる
- その後、70年代初頭からコレージュ・ド・フランスで教える
- 同時に、監獄の調査などのactivism 的活動にも積極的に関与

或る前提的確認

- 次々に変わる研究計画、そのたびに言い直される研究についての自己認識：それは悪いとはいえない
- 歴史語りの一種、素人的雰囲気 歴史学者ではないが、とはいえ...
- 20世紀後半の最も影響力の大きな哲学者の一人ということは前提で、彼が
いうことを金科玉条にすべき
ではない、ということ

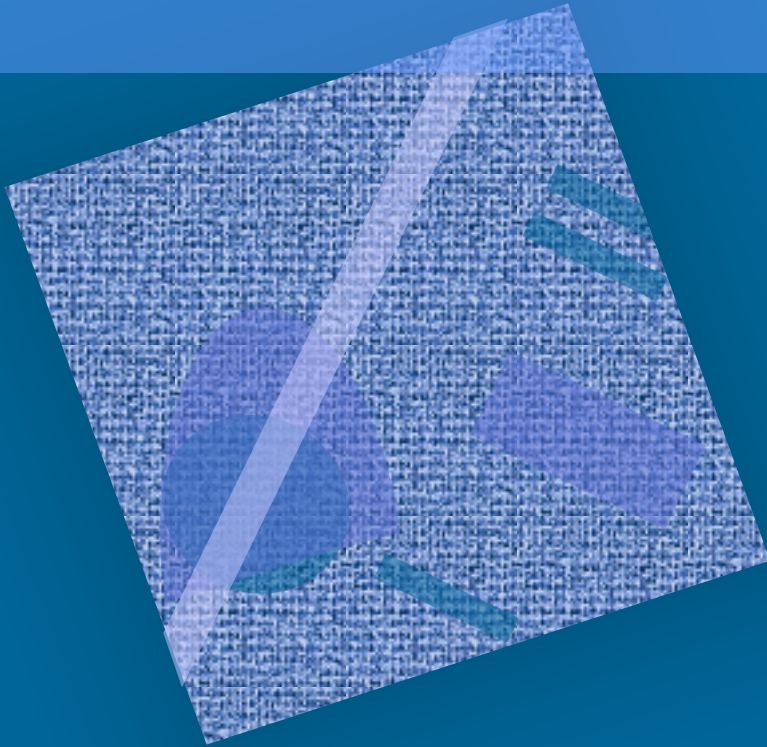
Biopouvoir, biopolitique

- 〈生権力〉、〈生政治〉という概念が明示的に展開されているのは、書籍では *La Volonté de Savoir*, 1976 nov. 第5章
- コレージュ・ド・フランスの講義では、*Il Faut Défendre la Société*, 17 mars 1976
- だから明示的展開の初出はこの『社会は防衛しなければならない』の最終講義ということになる

関連コーパス

- 以下の、コレージュ・ド・フランスの講義
- *Sécurité, Territoire, Population*, 1977-78
- *Naissance de la Biopolitique*, 1978-79
- とりわけ二つめの講義題目は『生政治の誕生』というのだから、生政治論が全面的に展開されていると推定されるが、実際にあたってみると、見込み違いになることに気付く

『知への意志』1976



〈抑圧仮説〉の否定

- 性は抑圧されてきたのか（Victoria朝）
- なぜ、われわれは自分たちが抑圧されているというときに、情熱的に語るのか
- むしろ「性の言説化」
- 権力行使の場に於ける、性言説の爆発
- 性について語ることを制度が煽り立てる

告白という装置

- 告白は権力関係において展開される儀式である というのも、人々は相手がいなければ告白はしないものであり、しかもその相手とは、単に問いかけ聞き取る者であるだけでなく、告白を要請し、強要し、評価すると同時に、裁き、罰し、許し、慰め、和解させるために介入してくる裁決 機関なのである
(第3章)

性の科学

- 19, 20世紀は性行動の分散化が起きた時代 倒錯を多様な形で樹立した時代
- *Ars erotica* vs *scientia sexualis*

権力の分析学(第4章)

- 権力がもつ生産性、積極的機能
- 至る所に遍在する権力
- 権力に対する絶対的的外部はない
- 権力の関係は、無数の多様な抵抗点との関係においてしか存在し得ない

権力の分析学(第4章)

- 国家・巨大な権力という唯一の形態に、性に対して働くすべての極小的暴力を結び付けるよりも、性についての言説のおびただしい産出を、多様かつ流動的な権力関係の場に沈めてみることに

第5章での定義

- **V. Droit de mort et pouvoir sur la vie**
- 長い間君主の主権を特徴づける特権のひとつは、生殺与奪権 主権とは、死なせる、生かすままにしておく権利
- faire mourir, laisser vivre
- 基本的に権力の発現形態は何かを奪うというもの

権力メカニズムの変化

- 死の支配から、生の管理へ
- faire vivre ou rejeter dans la mort
- 権力が、司法的なものから生物学的なものへと移行する 支配権から人口へ
- 権力の主要な役割は死刑の中にはなく、生命を保障し、支持・強化し、増殖させるということのなかに

Faire vivre ou rejeter dans la mort

- 17世紀以来、二つの主要な形態のもとで、生に対する権力は発展
- ① anatomo-politique du corps humain
- ② une bio-politique de la population

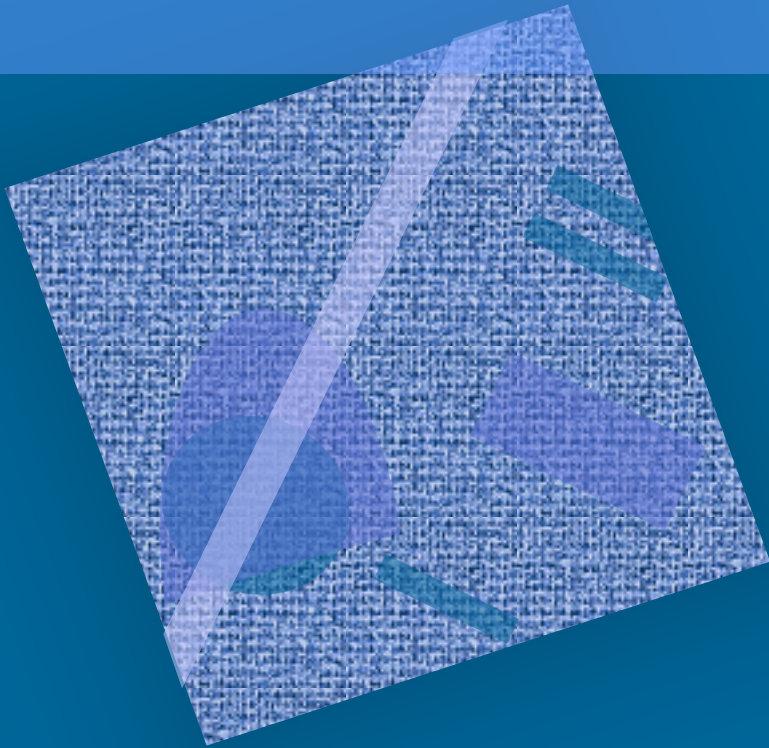
二つの形態

- ①は人間身体の解剖・政治学 身体調教、身体
の適性増大、有用性・従順さの増強 訓練・
規律を特徴づけるもの
- ②人口の生・政治学 繁殖、誕生、死亡率、健
康の水準、寿命、長寿、それらを変化させる全
条件への省察
- Population という概念に
注意 〈人口〉

生命の計算的管理

- 至高の権利はもはや殺すことにはなく、くまなく生を取り込むことにある
- 身体管理、生命の計算的 gestion
- まさに bio-pouvoir 時代の始まりである(ここで生政治・生権力の弁別的定義はない)

『社会は防衛しなければならない』 1997



『社会は防衛しなければならない』

- その講義自体は1976年1月7日から3月17日にかけて、11回 同じ年の11月に『知への意志』が公刊されているので、ちょうどそれを書き終えた頃に、この講義にあたっていたということがわかる
- この年の講義はフーコーの仕事の一種の分岐点（前後からも若干隔絶）

経歴上の屈折点

- *Il Faut Défendre la Société*

1976年1-3月の講義

- 『監獄の誕生』 fev. 1975
- 『知への意志』 nov. 1976

- だから、『監獄の誕生』(成功)の後、『知への意志』の準備・執筆期間にほぼ相当

- 自分の知的経歴を反省、
方向転換の模索

初回講義の冒頭

- (7 janv. 1976)
- 講義自体が手詰まりに 顔の見えない聴衆を前の一種のサーカス 正直、自分がやってきたことに少しうんざり この4, 5年の仕事にけりをつけたい、と

系譜学

- 科学であろうとする態度に付きものの権力意志
- だから、系譜学は、知を科学に固有な権力のヒエラルキーに刻み込む計画に対して、歴史的な知を従属関係から解き放ち、それを自由にしてやるという 営為
- 局在的な知の活性化のこと

権力・戦争

- 権力の非経済学的な分析は可能か
- 権力が力の関係の展開だとするなら、その分析は闘争・対峙・戦争の言葉で語られるべきではないのか
- 権力とは抑圧？
- 権力とは戦争？
- 権力とは、異なる手段で継続される戦争である

クラウゼヴィッツの逆転

- 政治とは、異なる手段で継続される戦争である
- Cf「戦争とは、異なる手段で継続される政治である」(クラウゼヴィッツ『戦争論』)
- 経済論から離れようとする、直ちに権力論はこの二つの仮説に出会う
- 権力は抑圧である(ライヒ仮説)
- 権力は力の戦闘的対峙である(ニーチェ仮説)

今後の見通し(実現せず)

- (14 janv. 1976)
- 今年からやりたいのは、戦争を、権力関係を分析するための原理と見なしうるかどうかを巡って、戦争の研究
- この5年間、discipline論をしてきた(Collège de France の最初から)
今後の5年間は戦争・闘争・軍隊の研究をしたい、と

最終講義 17 mars 1976

- 19世紀の重要現象のひとつ: 権力による生命の負担
- 権力による、生き物としての人間の把握
- 生物的なものの国家化

生殺与奪権

- 古典的主権論：生殺与奪権が根本属性のひとつ *faire mourir et laisser vivre*
- 主権者は、死なせることができるようには、生かすことができない アンバランス
- 主権的権力の効果は、主権者が殺すことができるときにしか行使されない
- 本質的に、殺す権利、剣の権利

新しい型の権力の出現

- 新しい型の権力による補完
- Faire vivre et laisser mourir
- 17, 18世紀に出現した、本質的に身体に、個々の身体に集中する権力の技術：労働の規律的テクノロジー
- Pouvoir disciplinaire

さらに新しい型の権力

- 18世紀後半、規律的ではない別の権力テクノロジーの出現
- 規律的ではないこの新権力の技術が適用されるのは(規律→**身体**とは違い)、人間の**生命**である
- これが向けられるのは、人間・種

生政治

- この場合、人間を単なる身体として捉えるのではなく、多数の人間を生命に固有のプロセスの全体、つまり誕生・死・生産・病気などのプロセスを備えた大きな塊として捉える

生政治

- 個体化よりは集団化
- 人間・身体ではなく、人間・種への照射
- 18世紀末の、人間種の生政治の出現

対象になるもの

- 問題になるもの： 誕生と死亡の割合、出産率、人口の繁殖
- このとき、最初の人口統計学とともに、この種の現象への統計的処置がとられる
- 繁殖、それに死亡率も問題

関心となる病気の位相の変化

- 疫病よりは、風土病への配慮
- コストのかかる治療費、力の減退など
- 突然襲いかかる死（疫病）ではなく、生命に忍び込み・蝕み・減少させ・弱らせる恒常的な死としての病気

公衆衛生

- 公衆衛生としての医学
- 老化
- 事故、不具なども
- 生権力による、保険、貯蓄、保障などの配置
- 人口によって作り出された環境が考慮に

人口

- この新しい技術 それは多数の身体、数え上げるのが難しい身体 人口
- 生政治が関与するのは人口なのだ
- 考察対象も集合的現象 持続的なものとして捉えられた人口、そこで産出される偶発的諸要素の考察

調整

- 対処：予測、統計的評価、包括的措置
- 調整的メカニズムの錬磨へ
- 人口に内在する偶発性の周りに安全のメカニズムを配置し、生命の状態を最適化すること
- 細部で個人を捉えるのではなく、包括的メカニズムで均衡・規則性の獲得を目指すように働きかける

生かし、死ぬに任せる権力

- 人口に関する技術と共に、生かす権力としての持続的で、知的な権力の出現
- 主権とは死なせ、生きるに任せるものだった
- それに対して、調整の権力と呼びうるような、生かし、死ぬに任せることからなる権力が現れるのだ

死の位置の変化

- 死なせる権利ではなく、生命を最大化し、そこに起こりうる事故・偶発性・欠陥の管理へ
- すると、死は権力の終わり・限界・末端になる
- 死は権力の外部になる
- 死が公的空間から周辺化され、私的なものに戻っていく

DとB

- 身体の規律的テクノロジー D
- 生命の調整的テクノロジー B
- D (**discipline**) = 監視・調教を伴う、個人身体の調節
- これは簡単だったので学校、病院、兵舎、工房などで盛んに実現
- B (**biopolitique**) は、それよりは困難

DとB

- D: 身体・有機体・規律・諸制度の系
- B: 人口・生物学的プロセス・調整的メカニズム・国家の系
- 規律と調整というメカニズムは同じレベルにはない だから両者は排除しあうことなく、互いに連動可能
- 例えば性現象を見よ

医学の重要性

- 性 二重の眼差し 個人的規律 自慰の批判
など 集団のレベル 遺伝的衰退・変質
- 19世紀の医学の重要性 医学とは、身体と同時に人口を、有機体と同時に生物学的プロセスを対象とする、従って、規律的効果と調整的効果を及ぼすことになる権力・知なのだ

原子力と、生命操作

- 原子力 生命そのものの抹殺の可能性：
生権力に対する主権的権力の過剰
- 生命繁茂、生物創造、怪物創造、管理不能
で普遍的破壊力を持つウイルス創造：生
権力の、人間的主権からのみ出し

生政治にとっての殺害

- では、この規律的・生命的権力に、どのようにして、殺すことができるのか
- そこでの人種主義の介入
- 人種主義を国家のメカニズムに組み込むことになったのは生権力の出現

人種主義

- 人種主義＝ 権力が引き受けた生命の領域に切れ目を入れる方法 生きるべき者と死ぬべき者との弁別
- 人種主義は戦争型の関係(生きたければ他者は死ぬべき)を新しいやり方で作動させる
- それは軍事的・戦争的・政治的関係というよりは、生物学的な関係なのだ

戦争の人種主義

- 19世紀末に成立する新しい、戦争の人種主義
- 生権力を通じて、死を与える権利という古い主権的権力が機能する それはつまり人種主義が機能・配置・活動するということ

ナチズム

- ナチズムは、18世紀以来、配置されていた新しい権力メカニズムが頂点に達したもの
- Nほど、規律的国家はなかった
- Nほど、生物学的調整が緊密に重視された国家はなかった
- 他方で、ここにおいて、殺すという古い主権的権力が最も完全な形で解放される

人口全体の死

- 死ぬ危険、全面的破壊に晒されることは、ナチスの服従の根本的義務の中に、そしてその政治の本質的目標の中に刻み込まれている。人口全体が死に晒されるところまで行かなければならない。

ナチズムの途方もなさ

- ナチズムの途方のなさ
- これは生権力を間違いなく全般化した社会だが、同時に、殺す主権的権力を全般化した社会でもある。
- 国家に、市民の生殺与奪権を与える古典的メカニズムと、規律・調整を中心にした生権力メカニズムとが、一致する

小括

- DとB
- 身体へ、と生命へ といっても多くの地点で弁別困難
- また、そもそもフーコーが長年行ってきた囚人、狂人研究 それらそのものが一種の〈生権力〉・〈生政治〉研究ともいえる

小括

- だから、D,Bの弁別を強く取る必要はない
- また、フーコー自身は結局、自分が萌芽的に立ち上げた生権力論を十全に展開することなく、次の主題群へと移っていった

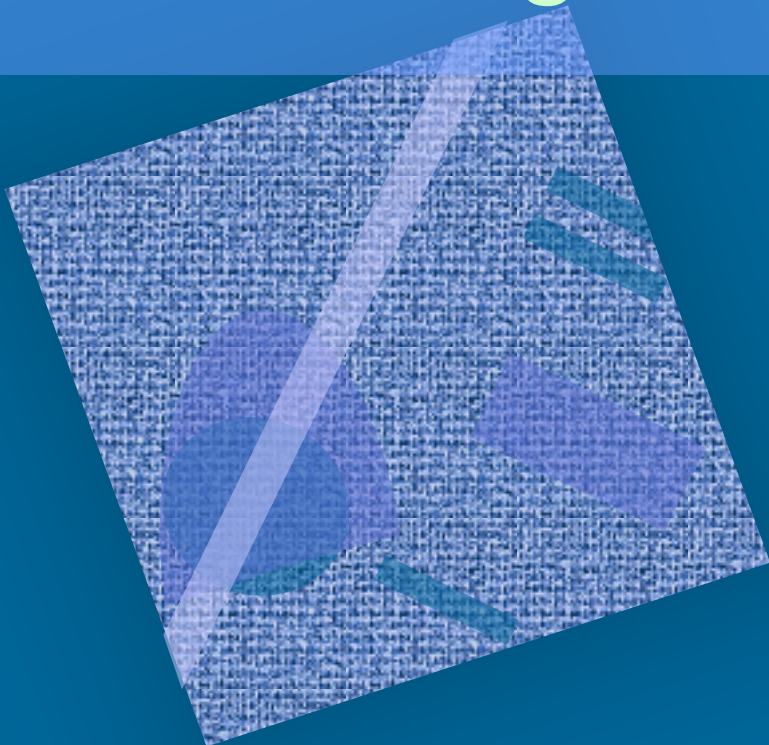
『生政治の誕生』以降

- 『生物の統治』1979-80 未刊講義
- その次の年以降からは完全に、最後の言説場（ギリシャを主要な題材にした自己・主体のテクノロジー分析）
- 『主体性と真理』1980-1
- 『主体の解釈学』1981-2
- 『自己と他者の統治』1982-3
- 『真理の勇気』1983-4

萌芽状態のまま

- 〈生政治〉論が、その後十全な含意を獲得するのは彼の死(1984)後、かなりたってから、90年代以降と述べて大過ない

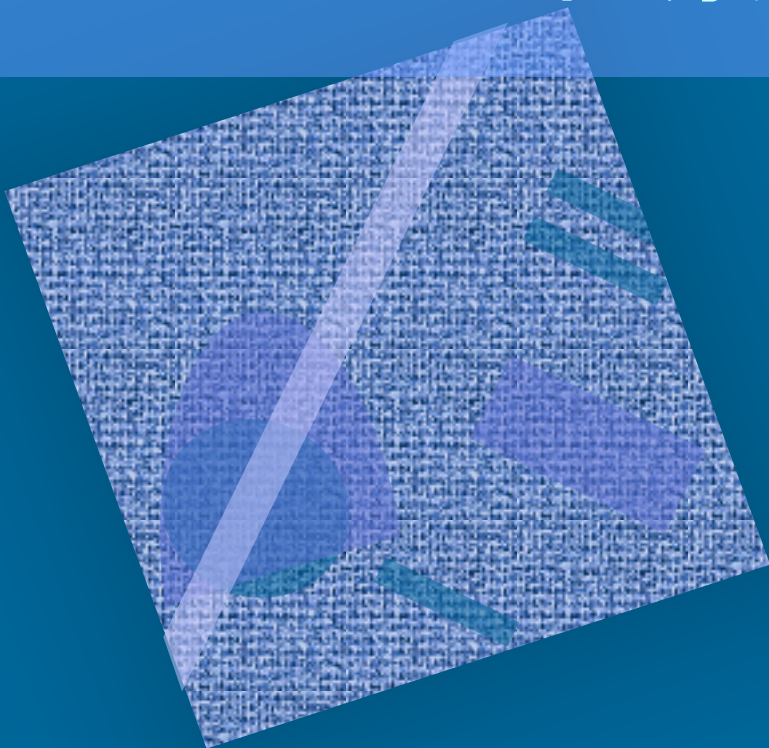
§ 2 ネグリ



Antonio Negri, 1933-

- ハートとの共著『帝国』(2000)の世界的成功以降、特に、全世界的に有名なマルクス主義系の思想家(イタリア人)
- マルクス主義 + ドゥルーズ・フーコー・デリダ等を中心としたフランス現代思想
- 現代的マルクス主義の展開の最も顕著な事例

背景·前提



イタリア現代思想の〈活気〉

- Croce, Gentile 20世紀前半
- Eco, 記号論・学識溢れる小説
- その後 80年代
- Vattimo, Cacciari 一部の識者に
- 90年代以降
- Negri, Agamben, Virno,
Esposito など

特殊な履歴

- 60年代半ば、非共産党系左派の労働運動（operaismo）の理論家として、頭角を現す
- 70年代（74-78）アウトノミア運動の理論的支柱のひとつ（工場、街路などでの自治権確立、労働拒否、空き家占拠、海賊放送など）
- 78年、アルド・モロ殺害事件の責任を問われ、79年、逮捕、収監

監獄・亡命・帰国・監獄・解放

- 83年、監獄から国会議員当選、出獄・フランスへ亡命(1983-97)
- 97年帰国、再び監獄へ
- 2003年4月、自由の身になる

最晩年のフーコーの評価

- フーコーの最晩年の著作の重要性は群を抜いている。それらにおいては、生への政治的介入の強い姿と、変革的実践の作業所が予描されている。ここでは系譜学はあらゆる弱い性格を失う。認識理論は構成的なものに転化する。倫理学はもろもろの変革的な次元を引き受ける。

(『〈帝国〉的ポスト近代の
政治哲学』158)

- * フーコー的生政治論
との連結

ポストモダンと生政治

- われわれは、ポストモダンを、資本の敵対関係が、一切の社会的関係、生と生産と文化のあらゆる結びつき、実存のあらゆる仕方を支配している状況と定義する。
- * 資本の生全体に対する全面的支配

或る種のポストモダニズム批判

- 実際に起きていることを現実的に認識しないで、この過程をアイロニカルに捉えるだけの人々がいた それは麗しき時代だったが、無責任時代でもあった
- 哲学的・歴史的修正主義が蔓延し、ハイデガー的な重苦しい存在論の、美学めかした解釈がはやるような時代
- Cf il pensiero debole
(G.Vattimo, P.A.Rovatti,
1992)

全体主義的社会主义批判

- 20世紀の社会主义国家への違和感
- マルクスとは関係がない、と
- 「(1989年ベルリンの壁崩壊を受けて)...その夜クラウスと私はおおいに飲み、愚かで全体主義的なあの社会主义がついに終わりを迎えたことを心から喜び合いました」(『未来派左翼』上巻、19)

『帝国』

- A.Negri & M.Hardt, *Empire*, 2000
- 『帝国』水嶋一憲他訳、以文社、2003
- 「21世紀の共産党宣言」
- A.Negri, *Il potere costituente*, 1992
(『構成的権力』)
- A.Negri,
Fabrique de porcelaine, 2006
(『さらば、“近代民主主義”』)

〈帝国〉

- 経済的・文化的交換のグローバル化
- 市場と生産回路のグローバル化に伴い、グローバルな秩序、支配の新たな論理と構造、一言で言えば、新たな主権形態が出現している。〈帝国〉とは、これらグローバルな交換を有効に調整する政治的主体のこと、この世界を統治している主権的権力のこと
(『帝国』3)

抵抗

- 労働の拒否など、多様な手段を介した抵抗へ
- 特に 特異な形態をとる activism 評価
- 実は、ネグリの〈思想〉自体、その概念分析等に本質があるのではなく、概念を用いた一種のactivism 性がその本質

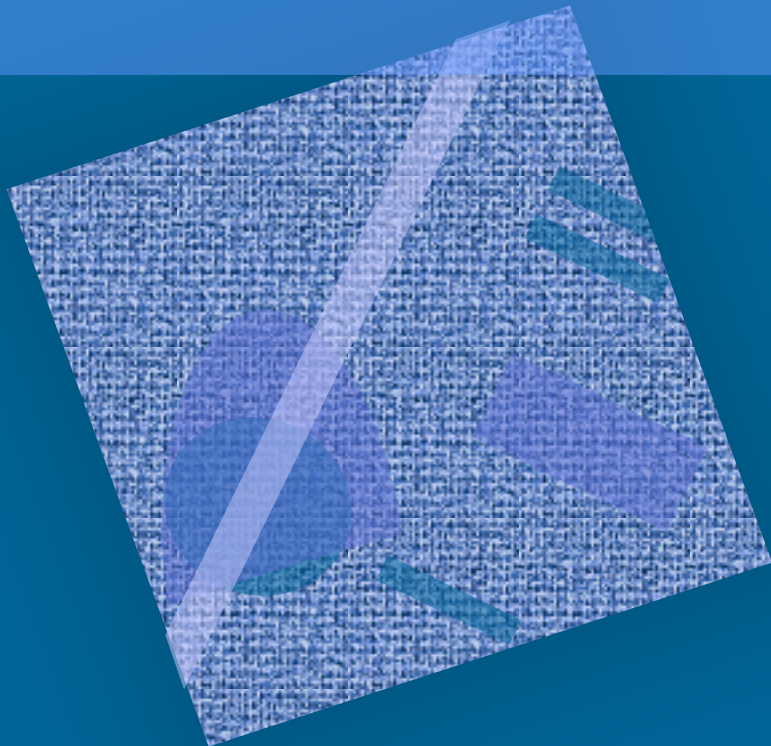
Activism 評価

- サパティスタ(メキシコ、チアパス州を中心としたゲリラ組織)
- NAFTA(北米自由貿易協定)で、米国農産物の関税撤廃への反対運動、 1994年
- 背景:先住民に対する構造的差別
- 新自由主義による後進国篡奪
- ポストモダンの革命運動
(internetの利用など)

Activism 評価

- 1995年、パリ大規模ストライキ(年金特別制度改革を巡ったもの バス停に集まり、議論する人々)
- シアトル 1999, WTO(世界貿易機関)会議: アンチ・グローバリゼーションを掲げた人々が、世界中から集結し、激しい反対運動を繰り広げた

主要概念



社会化された労働者

- 68年以降の大衆的叛乱、70年代のアウトノミア運動などの中で
- 工場のコンピュータ化
- 情報ネットワークの整備
- 工場の社会の中への浸潤

社会化された労働者

- 生産的労働の中軸部分は、工場労働者に限定されず、サービス労働や情報処理労働などに、多様化し分散化していく。
- このなかで出てくる労働者 = 社会化された労働者
- Cf. 『転覆の政治学』(1989)

非物質的労働

- 知識・情報・コミュニケーション・関係性・情緒的反応などの非物質的生産物を作り出す労働
- ①問題解決、象徴的・分析的作業、言語的表現などの、主として知的で言語的な労働
- ②情動労働

非物質的労働

- 非物質的労働というとき、そこでは明らかに単に生産的労働の古い再定義ではなく、新しい強度をもつ生政治的概念が導入されている。非物質的労働は、生産的労働と生の諸様式との混合体、さまざまな単独的存在と多様な差異からなるマルチチュード的な総体（『〈帝国〉とその彼方』21）

multitude

- M ≠ 人民、大衆
- 人民は一なるもの ところがMは多なるもの
- 大衆は識別不可能な塊 Mは多様な社会的差異はそのまま差異として生き続ける

マルチチュード

- Mは拡張された階級概念
- Mは自らの内に、家事労働する女性、サービス産業に従事する労働者、農業労働者、学生、研究者などを含む
- 生産活動の非物質的・社会的要素、労働提供のマスプロ化された無差別化から、主体的差異化への移行を強調するもの
(『〈帝国〉とその彼方』133)

絶対的民主主義へ

- 民主主義 = 一なるものによるガバメント
- 絶対的民主主義 = マルチチュードの非国家的・潜勢的な連合形態

では、生政治は？

- 社会化された労働者・非物質的労働：あらゆる社会的生の経済的・文化的・政治的な全側面に関わり、またそれらを生産するもの
- その事態を強調するために、〈生政治的生産〉と

生権力と生政治

- フーコーではあまり弁別されない
- ネグリの場合、原則的に前者が否定的、後者が肯定的概念 とも読める

生権力と生政治

- 「生権力は主権的権威として社会の上に超越的にそびえ立ち、命令を下す。これに対して、生政治的生産は社会に内在し、労働の協働形態を通してさまざまな社会的関係や社会的形態を創出する。」
(『マルチチュード』上巻 167)

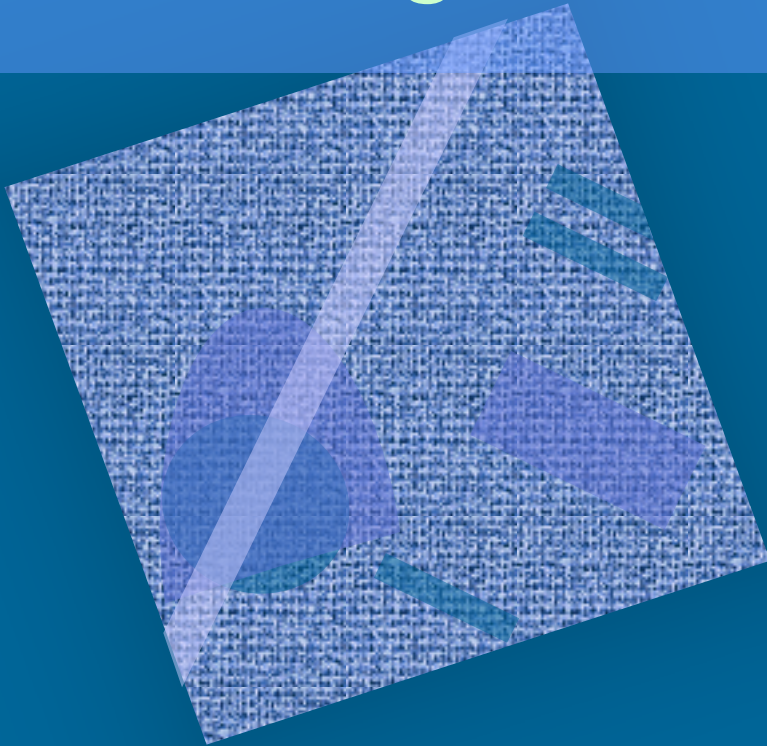
生権力 vs 生政治

- 生権力： 帝国
- 生政治： マルチチュードによる、帝国への多様な抵抗

小括

- ネグリの場合、activism 的特性が本質的
- 概念分析は必ずしも一次的ではない
- 生政治・生権力という概念は多様されるが、それも、基本的なマルクス主義的政治目標の中で位置づけ直されたもの
- (もともと多義的な)フーコー的な意味は、さらに拡散

§ 3 アガンベン



Giorgio Agamben, 1942-

- もともとは美学系の研究者
- 『中身のない人間』1970 美学・芸術家論
- 『スタンツェ』1977
- 『幼年期と歴史』1978
- 『思考の終焉』1982
- 『言語活動と死』1982
- 『散文の理念』1985

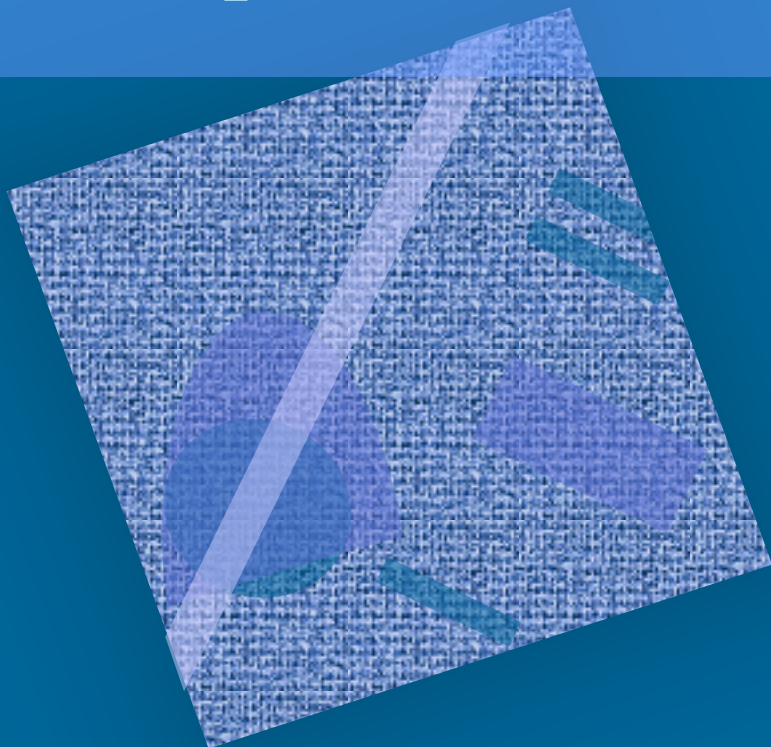
政治哲学の現代的展開

- その後、世界の政治体制の激変を受けて
- 『到来する共同体』1990 辺りから、研究領域を拡大
- 現代政治哲学の重要な一角を担う
- 博覧強記、全部を理解するのは困難

準拠文献

- Giorgio Agamben, *Homo Sacer*, Torino, Einaudi, 1995. 『ホモ・サケル』高桑和巳訳、以文社、2003.
- Idem, *Stato di eccezione*, Torino, Bollati Borlinghieri, 2003. 『例外状態』上村忠男・中村勝己訳、未来社、2007.
- Idem, *Quel che resta di Auschwitz*, Torino, Bollati Borlinghieri, 1998.
『アウシュヴィッツの残りのもの』
上村忠男・廣石正和訳、月曜社、
2001.

『ホモ・サケル』を中心に



ギリシャの二つの生命概念

- ζ ω η (zoe) vs β ι ο ς (Bios)
- ビオス: 特定の質をもった生、個別の生の様態、伝記の対象になりうるような生の形
- それに対してゾーエーは、「生きている」という最小限の形を晒す生、または、私的領域に閉じ込められた生物的な生
- Cf アレントの labor

善く生きること

- 古典世界においては、単なる自然的な生は本来の意味でのポリスからは排除され、純然たる再生産の生として、家の領域にしっかり閉じこめられている
- ト・ゼーン(生きること) vs ト・エウ・ゼーン(善く生きること) cf アリストテレス『政治学』

ポリス圏域にゾーエーが

- ポリスの圏域にゾーエーが入ったということ、つまり剥き出しの生そのものが政治化されたということは、近代の決定的な出来事
- 古典的思考の政治的・哲学的範疇の根源的な変容

ポリス圏域にゾーエーが

- 剥き出しの生と政治との関係を主題的な仕方で問いに付する省察だけが、政治的なものを暗がりから引き出し、思考を実践的つとめへと回復してやることができる

或る種の逆説性

- 古典ギリシヤ的にいうなら、ゾーエー・剥き出しの生は非政治的
- そのゾーエーが、政治的場面に引きずり出されるときにもちうる諸形態についての省察をすることこそが、現代の政治哲学の重要な課題、と

Sextus Pompeius Festus

- 『言葉の意味について』
- 聖なる人間 homo sacer とは、よこしまであると人民が判定した者のことである。その者を生け贄にすることは合法ではない。だが、このものを殺害するものが殺人罪に問われることはない。最初の護民法には、平民決議によって聖なるものとされた者を誰が殺害しても、それは殺人罪ではない、とある。悪い人や不純な人がホモ・サケルと呼ばれるのはそのためである。

Homo sacer

- Cf 古代ローマ 軍人宣誓 私が私の義務を果たさなければ、私はサケル(共同体から追放されたもの)となれ と
- 具体的には:境界石を動かす、父に危害を加える、客人に不正を働く etc

逆説・限界概念

- 聖なる人間は、誰もが処罰されずに殺害することができたが、彼を儀礼によって認められる形で殺害してはならなかった

主権の逆説(第1部)

- 主権者は、法的秩序の外と内に同時にある
- 主権者は事実、例外状態を布告し、それによって秩序の効力を宙づりにするという権力を法的秩序によって認められている者 だとすれば主権者は「法的秩序の外にありながら、法的秩序に所属している。というのは、憲法が全面的に宙づりにされうるかどうかの決定は彼にまかされているからだ」
- Cf シュミット
「主権者とは非常事態
についての決断者である」

例外状態

- 例外状態の逆説の一つ 例外状態にあっては、法の侵犯を法の執行から区別できない、ということ だから規範に適うものと規範を犯すものは例外状態に於いては余すところなく一致する
- * 主権者が、例外状態を設定できるなら、主権者は、法の執行・侵犯を同時に、かつ自在に
(少なくとも理論的には)

暴力と正義の交錯

- 暴力と正義という相反する二つのことがノモスの中心にあるということ
- 主権者とは、暴力と法権利との間の不分明になる点であり、暴力が法権利へ、法権利が暴力へと移行する境界線である

現代のホモ・サケルへ

- では、二〇世紀では、ホモ・サケルはどんな形をとりうるのか

「生きるに値しない生命」

- lebensunwertes Leben
- Cf. Karl Binding & Alfred Hoche,
- *Die Freigabe der Vernichtung lebensunwerten Lebens*, Leipzig, Felix Meiner, 1920.
- 『「生きるに値しない命」とは誰のことか』
- 森下直貴・佐野誠訳、窓社、
2001
- ビンディングは法律家、
ホッヘは医師

誰が、なのか？

- 1: 治療不能な癌患者、末期結核患者、瀕死の重傷をおった者など、末期状態の患者
- 2: 治療不可能な知的障害者、痴呆患者
- 3: 上記二つの中間グループ 瀕死の重傷をおった意識のない患者 PVSに近いカテゴリー
- とくに2への積極的介入支持
同情、経済的理由
(〈慈悲殺〉と経済的理由の
融合)

「生きるに値しない生命」論の効果

- 公刊直後、ヴァイマル期：大きな反響、ただし否定的見解の方が多い
- だが、ナチス安楽死計画(1939-)への反映(直接的関係を否定する見解もあるが...)
- 知的障害者等の抹殺へ
- その後のホロコーストへの技術的・体制的準備

安楽死

- ヒトラーの安楽死計画
- 主権権力が、剥き出しの生に関する決定をするようになった、ということ
- 安楽死において人間は、自分以外の人間においてビオスからゾーエーを分離し、剥き出しの生のような、殺害可能な生を引き出す

人間＝生ける富

- Hans Reiter:『国家と健康』論集の一論攷
- 「...ヘルフェリヒは、ドイツにおける国民の富は約3100億マルクであると見積もった。ツアーンもまた、投機の基礎としてこの3100億マルクを用いているが、この物質的な富に加えて、1兆610億マルクの生ける富が存在する、と指摘している」
- 生物学と経済学の論理的統合へ

『国家と健康』序文から

- 「国民社会主義革命は、生物学的変性因子の排除へ、また人民の遺伝的健康の維持へと向かう諸力に訴える。言い換えれば、国民社会主義革命は、住民全体の遺伝的健康を強化し、国民の生物学的開花を害する諸影響を取り除くことを目指す。本書で扱われる諸問題はただ一つの民族に関わるものではない。ここで提起される問いは、ヨーロッパ文明全体にとって死活の重要性をもっている。」

低圧化人体実験

- 航空機気圧問題のため、人体実験 ダッハウに気密室 Versuchepersonen
- 12000メートルに相当する気圧下

低圧化人体実験

- 「4分後、VPは発汗し頭を振り始めた。5分後に痙攣が起こり、6-10分後、呼吸が速まり、VPは意識を失った。10-30分の間は呼吸は1分あたり3回にまで遅くなり、それから完全に停止。その間、顔色は強いチアノーゼを呈し、口角に涎がでてきた」

ホモ・サケルとしての囚人

- 冷水に漬ける実験、海水飲用実験など
- これらを純粹な犯罪と見なす誘惑は強いが、それは駄目
- 高名な研究者
- しかも今世紀、囚人・死刑囚への実験は何度も マラリア、ペラグラ
- 死刑囚・収容所住人はホモ・サケルになった

Coma dépassé

- ピエール・モラレ、モーリス・ゲーロン 超昏睡の定義 1959年
- 「...外界との関係に関する生命機能が全面的に停止することに加え、植物的生命機能も障害を来すに留まらず全面的に停止した昏睡」

スイッチを切る？

- 新たな蘇生技術と一体
- 「われわれが超昏睡という用語で定義したこの状態を体現する不幸な者を前にして、生命機能が全く回復しないまま、一日また一日と心臓が鼓動し続けているとき、ついには失望が慈悲と争い、スイッチを切って解放してやろうという誘惑にひどく悩まされるようになる」

脳死

- これは、技術的・科学的問題を越えている、と二人は洞察 新たな死の定義
- 心臓の鼓動停止、呼吸停止 この判断基準に失効を迫るもの
- この患者は臓器採取にとっては理想的条件
- 法的整備 1968年、ハーバード基準 脳死

ホモ・サケルとしての脳死体

- 生と死は、完全には科学的概念ではなく、むしろ政治的概念であり、そうである以上、何等かの決定によって初めて正確な意味を獲得する
- 超昏睡者、偽の生体が生と死の間を揺れ動いている蘇生室は、人間と人間の技術によって初めて完全に制御された純粹な剥き出しの生が出現する例外状態を画定している。まさにそれは、自然的身体ではない、ホモ・サケルの極端な化身である

例外状態の規範への接近

- 1933年2月28日、ナチス 人民と国家の保護のための政令 そこで、個人の自由、表現・結社の自由、住居の不可侵性、文通・電話通信の秘密に関する憲法の条文を無期限で宙づり
- 例外状態の恒常化・規範自体とみわけられない

収容所・例外状態

- 収容所とは、例外状態が規則になり始めるときに開かれる空間のこと
- 例外状態とは、その本質上、これこれの危険があるという事実状況に基づいて法的秩序が一次的に宙づりにされることだが、いまやそれが永続的な空間的配置を獲得する

ユダヤ人・剥き出しの生

- 例外空間としての収容所の逆説的立場
- 例外状態が規範的に実現される構造こそ、収容所
- 収容所でなされることが合法か違法かと問うことは全く無意味
- ユダヤ人： 市民権、国籍剥奪
完全に剥き出しの生に還元される
まさに何の媒介もない純粹生へ

Der Muselmann

- ホモ・サケルは純粹なゾーエー
- Primo Leviの報告から、ムスリム それは収容所で、屈辱・怖じ気・恐怖のためにすべての意識と人格が無化され、絶対的きわまる無気力に陥ってしまった人
- 極度の飢えなどから、姿勢がアラブ人が祈っているように見える(QCR)
- フィルムでも、ムスリムは避けられる

ムスリムの場所

- 「歩く死体」、「生ける屍」、「ミイラ人間」
- 生と死の境界に住む人
- 「神の火花が自分のなかで消えてしまい、無言のまま行進し、働く非・人間たち」
- 見かけは人間のままでも、人間が人間であるのをやめる地点が存在するのだ その地点がムスリムであり、収容所は彼にうってつけの場所なのだ

現代の〈ホモ・サケル〉

- 「生きるに値しない生命」
- 安楽死の対象者
- 脳死患者
- ナチス政権下の強制収容所内の収容者
- 特に、収容所内部での人体実験被験者、ムスリム

小括

- 生全体の統御、気遣い
- 生権力が到達する限界点 ビオスをはぎ取られた剥き出しの生・ゾーエー
- ゾーエーの画定と制御
- 生政治から、死に関わる政治へ